
ニコラ・プッサン作《バッコスの前のミダス》
—初期神話画における場面選択の特異性—

ローマで活動したフランス人画家ニコラ・プッサン（1594-1665）は、1620年代後半から1630年頃の初期時代に、古代ローマ、ギリシア神話に取材した物語画を好んで描いた。大多数の作品の史料や証言が伝わっていないため、この時期の制作背景や画家の意図については、依然として明らかでないことも多い。本発表では、《バッコスの前のミダス》を含む1630年頃に描かれた三作品を取り上げ、「場面選択」という新たな観点から、この時期の画家の関心の所在を探る。

ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク所蔵の《バッコスの前のミダス》は、オウィディウス『変身物語』第11巻で語られるフリュギアの王ミダスの物語を描いた作品であり、前景にはバッコスに跪くミダスが、遠景には河で水浴する一人の男が描かれている。ミダス王の物語は絵画主題としては非常に珍しく、画家が格別の関心を寄せたことが推測されるが、この作品に対してなされた論考は決して多くはない。積極的な議論を阻んできた一因として、図像の不明瞭さが挙げられる。本作品は、描かれている物語場面を特定することが一見して困難であり、先行研究においても、表わされた場面についての解釈が分かれてきたが、いずれにしても十分な分析はなされておらず、文学典拠との齟齬が生じている。

本発表では、画家が複数の場面を観者に想起させるため意図的に曖昧な表現を用いた可能性に配慮しながら、先行研究での議論に再検討を加える。まず、この主題の先行作例としてプッサンが参照しえた、16、17世紀のオウィディウスの『変身物語』に付された挿絵の系譜に本作が連なることを示し、特に1619年にパリで刊行された版の挿絵を着想源として挙げる。次に、改めて『変身物語』の叙述と照合することにより、これまでは顧みられなかった物語場面、バッコスが望みを問い、ミダスが特殊な力を欲する「ミダスの願い」の場面が、本作品に表わされていることを指摘する。

続いて、《バッコスの前のミダス》の再考で導いた結論を踏まえ、同時期に描かれた別作品へと目を向ける。《アポロの凱旋車の操縦を請うパエトン》（ベルリン絵画館）と、革新的な図像について近年も新たな論考が発表された《ディアナとエンデュミオン》（デトロイト・インスティテュート・オブ・アーツ）において、伝統とは異なる場面選択がなされていることを明らかにする。どちらの主題においても、物語の最も劇的な結末部分を描くのが慣例であったのに対し、プッサンは、《バッコスの前のミダス》と同様、人間が神に願いを述べる序盤の場面を選んだ。この事実は、物語を視覚化するに際しての画家の一貫した理念を示している。結論として、ちょうど模索期にあった画家が伝統からの差異化を図る手段として用いたのが特異な場面選択であったこと、そして、「願いの場面」を描くことでしか達成されない特殊な教訓の強調が目的であったことを述べる。